

# 青 谿 書 院 の 教 育

吉 川 正 二

## 1. 池田草菴の風格と思想

池田草菴（名は禎蔵，後に緝，字は子敬，号は草菴）は文化10年（1813年），但馬国八鹿町宿南村の農家に生れた。10才の時に母を，12才の時に父を失なったため，3男でもあった彼は，近村広谷の満福寺の小僧にやられた。19才の時寺を抜け出て，単身京都に上り，苦学すること10年余り，28才を迎えて，京都一条坊に私塾を開くまでになった。かくして彼の名声がようやく高まるに及んで，郷里の人々はその学徳を慕い，しきりに帰国をすすめるまでに至った。やがて天保14年，彼31才の時，ついに帰国を決意して，ひとまず郷里の近くの八鹿にあった立誠舎に落ちつき，後進の指導に当たった。この時より彼の本格的な教育事業が始まる。此処に居ること4年，彼35才の時，この青谿書院を郷里の地に建てて移り住んだのである。以後31年間，その間嘉永4年の江戸行（佐藤一斎訪問），春日潜庵慰問のための京都行3回，晩年療養のための東京行と，52才以後の福智山藩への講学の外は，足ほとんどこの地を離れることなく，講学読書，ただ自己の研修と子弟の誘掖に全力を尽したのであった。

書院建設以後数年を経た頃，ペルリの来航となり，時勢は急迫を告げてきた。かくして鎖国・攘夷・開港・尊皇・佐幕等の議論が沸騰して国中が騒然となり，世に志あるの士はいずれも国事に東奔西走するようになった。しかし草菴は内面深く国家の前途を憂えつつも，当時の志士の「揺動を免れざる」行動を戒しめて，自身は専ら学問の考究と子弟の教導に専念することに努力し，それによって国家社会に報じようと考えたのである。このことは安政元年，吉村秋陽に宛てた手紙の一節に，「因って益々励精進歩綱常一段之

処、日夜考究修行いたすより外無之候。国家昇平の恩に報い候も、是より又外の計無之候と決着いたし申居候。」とあることによって察せられる。従って彼にはいわゆる 志士的な風格 はみられない。しかしながら 自己の修養完成と、子弟の内面的陶冶をもって自己の使命とする教育者の風格は、生涯を通じて躍如として現われている。文久3年彼51才の時、同国但馬に生野の変が起り、天下の耳目を騒がした時においてすら、彼は「煽惑」と「揺動」とを戒しめ、子弟が輕挙妄動に走らぬよう戒しめ、自身も決して動かなかったのであった。

このことは彼が決して国家社会の動きに無関心であったことを意味するものではない。何故なら彼はそれ以前の安政元年に『時務六策』<sup>1)</sup>を著しているからである。これは 定志・謝交・儲糧・講技・崇文・固本の6項からなり、「憂国の至情、止むを得ざるの苦心」よりこれを作ったのだと記している。これは彼の政治論であり、彼が単なる隠逸の士ではなく、内に激しい国家社会を憂える情熱を蔵していたことを示す貴重な文献である。しかしながら彼は当時の志士の間によく見うけられた「奔竟の念」「喜事功名の念」を心から嫌悪したのである。彼の名著『肄業余稿』や書簡を通じて強く感ぜられることは、富貴や名利の惑に陥らぬよう戒めている点である。要するに彼は幕末維新の多事多難の時にあって、「身は事務の外に超え、心は経綸の思いに苦しみ」（『肄業余稿23項』）つつも、あくまで名利を追わず、独りを慎しみ、自己の人格の完成と独立をめざして学問への道をまっすぐに進みながら、子弟の教導に専心従事した典型的な教育者と言ってよいであろう。池田 粂郎氏が草菴の風格を評して、「自己を発見し、自己を完成し、山林の自由と平和を愛して、其志を身後の世代に求めし、孤高の聖者」<sup>2)</sup> とうたっているのは、簡にして要を得たものと言うべきであろう。

草菴の最初の学問的師匠は相馬九方であるが、彼からは思想的にほとんど影響を受けていない。むしろ莫逆の友春日潜庵の影響を受けることが多く、

1) 青谿書院全集第2篇上 大正2年 114頁—125頁

2) 池田 粂郎 「池田草庵」 昭和28年 6頁

従って彼は最初陽明学に沈潜したようである。それは彼30才の時、『古人君望に与える書』の中で、「僕の学もとより道うに足らず。然れども結髪以来、為すあらんと欲するの志則ち止まず、近年金谿姚江の学を信じてより、一念道に向うの心、日に勇み月に猛し、直ちに此の生を將いて、此の道に殉ぜんと欲す。」<sup>3)</sup> と言い、また弘化元年（32才）に陽明学者にして彼の友人である安芸の吉村秋陽に宛てた書簡の中でも、ほぼ同様のことを述べている。また彼が嘉永4年（39才）、江戸に佐藤一斎を訪ね、彼に師事しようとしたことは、彼が一斎に上った書中に「弟子の末席に従い云々」の語があることにより知られる。従ってこのような事情からであろうか、彼を陽明学派に入れている人が多い。<sup>4)</sup>

しかし彼はやがて陸王学が末学の弊に陥っている現状を慨歎して、「予心を陸王の学に潜めて年あり、陸王の学未だ必らずしも専ら本体を談ぜず、専ら本体を談じて工夫を略すれば末学の弊なり。予固より之を戒しめざるにあられども、駸々然として其の弊に流れて自ら知らず。」<sup>5)</sup> と述べ、更に進んで程朱・陸王各派の対立にあきたらず、これ等を採長補短し、綜合統一しようとの態度に出ている。『吉村秋陽に答える書』において、彼はこの点について次のように述べている。「程朱陸王の学、門戸角立、流支派別、世儒之を論じ、宛も枘鑿の相容れざる如し。僕は則ち敢て然か謂わず。皆其の人を崇び、皆其の文を読み、言論風旨の相容れざる処は参互錯綜し、深くその由を考え、短を捨て長を集め、弥縫装綴して、以て一家の学を成す。是れ僕のこの学に従事する所以なり。」<sup>6)</sup>

このような彼の学問的態度は、終に明の劉戡山の著書に接するに及んで、彼の学説に深く傾倒するに至った。即ち『劉氏全書を読む』の中において、「朱王の學術互に相是非し、衆論紛々たる固より一日に非ず。直ちに劉氏に

3) 青谿書院全集 第2篇上 53頁

4) 井上哲次郎著 「日本陽明学派の哲学」 明治33年、  
高瀬武次郎著 「改訂日本陽明学」 明治40年

5) 青谿書院全集 第2篇上 73頁

6) 同 上 110頁

至り、両造を出して聴断し、調停和融し、必らず之を至当に要して己む。予故に曰く、朱王の後互いにこの人を欠くことを得ず。特に平日主張するところの慎独の説は工夫切実にして、証微細に入る。実に千聖の真血脈たり。」<sup>7)</sup>と言い、また『肄業余稿』第476項において、「有明300年、賢儒輩出して、學術異同多し。最後に劉氏出でて斟酌調停、尤もその粹を得たり。而して劉氏の著、是また其の尤も粹なるものなり。是れ余の平日敬服して信嚮する所以の者なり。」と述べているように、彼は劉氏が朱王両派を調停和融したと考え、その説を信奉したのであった。<sup>8)</sup>

かくして彼の最後に落ち着いた所は、慎独の思想にあった。これが彼の風格とも合致し、生涯の生活態度をも決定して、幕末多事の中にあっても世事に動かされることなく一意自己の道に進んだゆえんである。この慎独の思想は『肄業余稿』第247項に「大学正心誠意劉氏の説は易るべからず。……其れ然而して後、大学中庸統紀の一般、俱に慎独を以て究竟の功夫となすは、余深くその卓見に服す。」と述べてあるように、明儒劉戡山の影響を受けたものである。彼は劉氏の『人譜』を非常に尊信し、塾生にもたびたび講義していることは『肄業余稿』中にも散見しているところである。しこうしてこの人譜を流れる根本思想は、慎独と慎独に入る工夫と言ってよい。即ち証人要旨においては慎独の何であるかを説き、それに入る注意事項と実行方法とを述べ、紀過格においては慎独を妨げる5種の過、すなわち微過・隱過・顯過・大過・叢過を挙げて、この内容を事細かに分析し説明している。それは恰も成唯識論における煩惱の分析を思わせるものがある。しこうして草菴がこの人譜を読み、それより得たものは「欺かざること」にあったようである。『肄業余稿』第143項にこのことを述べて言う、「人欺くべし、自ら欺くべからず、人瞞すべし、自ら瞞すべからず、慎独戒懼、収摭保任、これは是れ静中功を用いるの力なり」と。かくして草菴においては自欺しない意味の慎独は更に進んで、自欺しないこと即ち精神の平静となり、俯仰天地に恥

7) 青谿書院全集 第2篇下 19頁

8) この項は、豊田小八郎著 「但馬聖人」 明治40年 に負うところ多し。

ちず、正道を踏んで外物に煩わされない境地へと進んだようである。即ち遠く宇都宮より学び来た松本正柱が、帰国後涼快堂という塾を開き、その塾記を請うた際（彼50才）作った『涼快堂記』の中で、彼はこの点をはっきり示している。「夫れ涼は熱せざるの謂なり。快は累せざるの謂なり。……平々常々大中至正の道に帰すれば、則ち所謂 慎独の極功なり。」この彼の思想は晩年において「予常に吾が子輩に示すに、天人一理至道二なし」（肄業余稿第395項）と言っているような思想に発展して行ったのではなかろうか。

『肄業余稿』の最後の部分は晩年の作ではあるが、その作中にはこのような天に則した平々淡々、行雲流水の思想が随所に現われている。また晩年の明治9年、愛児を失なった悲しみの中において作った『奚疑録』中において、彼は「生固より自然なり、死亦自然なり。自然の理に任せ、自然の化に乗じ、而して我に執なく、我に著なし。これをこれ天を楽しむと謂い、これをこれ命を知ると謂う。」と言っている。かく考える時、彼においては独りを慎しむことは終に天地万物の生命に通い、自然法爾の世界へ進んだのではないと思われる。ここに至って彼の教育は無理のない自然の、しかも真に力強いものになったと思われる。

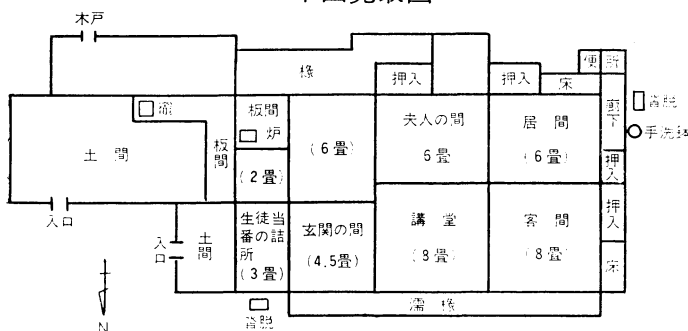
## 2. 青谿書院の概況

青谿書院は前項に述べたように、草菴35才（弘化4年）の時に郷里宿南村に建てた漢学の私塾である。この書院の名称は吉村秋陽に宛てた彼の書簡（弘化4年6月11日付）において、「山溪の窮る所に青山村と申す山村あり。今般築き候草堂その溪口に相当り候故、青谿書院の名を命じ申し候。」と言っているように、自然の位置と景勝より名附けたものである。<sup>1)</sup>

書院の建物は今も原形を留めて、後継者の子孫が在住しておられる。建物は南面に山が迫り、前面は石垣を積んだ崖である。従って建物は大体北面しているが、それだけ読書と講学には落ち着いた環境であったと思われる。この平面図はだいたい次の図のようである。

1) この名称は「青谿書院記」のはじめに同様の意味のことが記されている。

平面見取図



この建物には屋根裏式の相当広い2階があり、これは塾生の宿舎として自習室兼寝室にあてられていた。この他塾生の増加に伴ない、別に2階建の書生寮が2棟あったが、一つは取りこわされ、他は住宅か納屋になっているようである。

この塾に学んで入門帖に記入した者は、合計**611**名に上り、その外に立誠舎4年間の入門生**62**名を加えると、総計**673**名の多数に達して、全国各地から来遊している。その他入門帖には記載していないが、豊岡藩学や福智山藩学へ臨時講義に行った時の人々を加えると更に増加すると思われる。開塾期間は前後**35**年間であるから、1年間の新入門者平均は**19.2**人に当たる。入門資格・年齢・在塾期間等の規定は別に定めていないので、常に何人ぐらい塾に学んでいたかは判明しないが、明治元年の調査<sup>2)</sup>では**150**人と記されている。今入門帖により、これの一覧表を作ってみると下表のようになる。

この表によると、まず入門者数は年次により相当の変動があるが、特に開塾数年間と晩年**10**年余りが多い。開塾当時は草創の気が漲り、活気に満ちていたためと思われ、晩年に多いのは草薙の名声の高まりと、一般人の向学心の向上のためであろうと思われる。

階級職業別方面では、平民が最も多くて、全体の**70%**に当る**473**名に上り、次が士族の**143**名、次が僧侶の**43**名という状況である。彼は農家出身の関係

2) 日本教育史資料巻8 明治37年 302頁

1. 階級職業別年次別表								2. 年次別地方分布表										
年号	入門者数	公卿	士族	平民	神官	僧侶	医師	但馬	丹波	播磨	山城 丹後	摂津 和泉	四国	中国	九州	関東	其他	
天保14	35			33	1		1	28	7									
弘化 2	7			6			1	7										
3	20			20				19	1									
4	33		4	28			1	27	1		1		2					
嘉永 4	9		1	7			1	6	1		1		1					
5	7		1	6				4	2				1					
6	5		1	3			1	2					3					
7	7		1	6				6		1						1		
安政 2	14		3	11				6	2		1	1	2			1		
3	13		2	11				8			1					2	1	
4	15		1	13		1		10				2	2			1		
5	10		1	9				9						1				
6	11		3	8				6	1			1		2			1	
万延 1	19		2	15		1	1	14	2	1			1			1		
2	18		6	12				13						2		3		
文久 2	20		4	13		2	1	14				2	3		1			
3	14		3	10		1		8	1		1			2				
4	35		10	24		1		23	9	1		2	1					
元治 2	22		9	11		2		10	7	2	2							
慶応 2	9		2	6		1		4		3	1	1						
3	33		13	15		5		15	4	1	3	1		3	6			
4	46	2	24	21	1			17	4	1	5			16	2	1		
明治 2	39		13	26				17	8		3		2	4	3		2	
3	26		16	8		2		7			1		6	8	1	1	3	
4	39		23	12		2		15	1	1	3	4	6	3		4	2	
5	24			14		9	1	15	1	1	2	2		2			1	
6	10			10				7		1							2	
7	26			20		6		20	9	2		1			2		1	
8	32			27	1	4		15	6	2	2						4	
9	33			31		2		16	5	5	2	2			2			
10	30			25		4	1	9	1	3	2			9	1		1	
11	12			12				5		1	2	1	1	1				
合計	673	2	143	473	3	43	9	383	73	26	33	20	33	53	17	17	18	

## 3. 国 別 人 数 別 表

但馬	丹波	丹後	播磨	讃岐	周防	摂津	因幡	美作	肥前	和泉	下野	山城
383	73	26	26	26	16	12	11	11	11	8	7	7
武蔵	備前	肥後	伯耆	阿波	安芸	伊予	伊勢	常陸	加賀	長門	備中	大和
6	5	5	4	4	3	3	3	3	3	2	1	1
紀伊	近江	若狹	豊前	尾張	美濃	不明	合 計					
1	1	1	1	1	1	7						
											32ヶ国	
											673名	

からでもあろうが、終始庶民の友となり、階級的意識は非常に少なく、早くから四民平等の思想を懐いていたようである。彼は後述するように、塾において士族と庶民の差別はしないで、年令によって上下を定めていた。また当時穢多として蔑まれていた人々についても、「彼等は平生人間同等の取扱を受くることを得ずして、ほとんど禽獣と同一視せらる。これ人間の通議に悖るのみならず、この弊また恐るべきものあれば、この称を廃し、他の四民と逕庭なきようにすべし。」<sup>3)</sup>と、唱えて明治維新以前にこのような卓見を述べているのである。このような事情から特に平民の入門者が多かったのではなからうか。また草庵は最初僧侶の入門を禁止していたのであるが、<sup>4)</sup>後年にはこれを許している。この間の事情は判明しないが、これがために原宣明や筒川方外等の仏教界の大家を出している。

次に地方別分布の状態を考察すると、さすがに地元の但馬が最も多くて57%の過半数を占めている。しかし年代別にみると、過半数を占めたのは文久4年までの前半であって、元治2年以後になると僅かに明治7年のみである。これによると但馬の青谿書院から日本の青谿書院へと発展したであろうことが窺われる。もし草庵にしてみっと積極的に活動していたならば、更に天下に名を成したかもしれない。しかし『青谿書院記』に明言しているように、「夫れ身を奉じて山に入る者は、固より当世に意なし」といった彼の言

3) 池田小八郎著「但馬聖人」明治40年刊 46頁

4) 「贈真宗僧宗隆序」 青谿書院全集第二篇下 伯裁遺稿 25頁



う慎独の生活を送ったがために、彼の交友範囲は狭い範囲に限られ、進んで門戸を張るということはなかった。この点に関しては中江藤樹の行き方と相似たものがある。事実彼は中江藤樹を尊敬し、大阪に出た際、藤樹書院に参詣しようとして、病のため果し得なかったことを大いに遺憾に思ったと、吉村秋陽宛の書簡（弘化2年11月8日付）の中に記している。

但馬の次に多いのは丹波の73名であるが、これは生母足立氏の出身地であると共に、また彼が福智山藩に講学のため招かれた関係によるものと思われる。四国・中国・九州より遊学している者が比較的多いのは、四国では讃岐の林良斎と親友であり、中国では安芸の吉村秋陽、周防の東沢潟、九州では平戸の楠本碩水が彼の親友として、また弟子の礼を取った関係から彼の名声が当地方に聞えていたためであろう。また遠く関東から江戸京都などを通りすぎて、この地まで遊学しているのは、草菴40才の時、宇都宮藩が礼を厚くして、幼主の師傅として招聘しようとした関係によるものと思われる。

草菴は今述べたように、終始庶民の友として子弟の教育に尽瘁したのであるが、彼の塾生中より明治時代において、日本の国家社会に大きい貢献をした人々も相当多いのである。その主な人々を挙げるならば、北垣国道（樞密顧問官・男爵）、原六郎（実業界の先達）、久保田謙（文部大臣・樞密顧問官・男爵）、浜尾新（東大総長・文部大臣その他）、井上光（陸軍大将、男爵）、一条実輝（明治神宮宮司・公爵）、若宮正音（農商務次官）、日比重明（沖縄県知事）、吉村寅太郎（4高校長）、芳村正乗（神習教創立者）、原宣明（禅宗の大家）などがある。また草菴の精神を継ぎ、育英の道に志して私塾を開いた人々には、安積楽之助の自成軒（但馬和田山町）、久保田精一の宝林義塾（豊岡市）、斎藤哲太郎の山陰義塾（八鹿町）、森周一郎の味道館（但馬浜坂町）等がある。また明治時代において、但馬地方での先覚者や功労者は直接にか間接にか、ほとんど草菴の影響を受けていない者はないとは、古老の語るところである。

## 3. 青谿書院の教育

青谿書院の教育について、まず最初に注意を引くことは、この書院設立の目的が子弟の教育にあるというよりは、むしろ草菴自身の学問研究のため、自己の修養研鑽のためであったことである。このことは彼自ら作った『青谿書院記』の冒頭に、「青谿書院は池田緝読書の処なり」と端的に述べてあり、更に「乃ちまた笈を負いて帰る」と帰郷の心境を述べているところに明白に読みとることができる。彼はこの書院記の中で、「弘化丁未6月実を始めて徒る。然る後吾が終焉の図定まれり。」と言っているように、以後31年間、足とほとんどこの地を離れることなく、一意専心子弟の教導に努めたのであるが、その根底に動いた心境は実に笈を負いて帰り、読書研学することであったと思われる。彼の主著の一つである『肆業余稿』をみると、彼が如何に自己に鞭打って道への精進に志し、日々に新たに学問研鑽と自己の人格完成を願ってやまなかったかが窺われる。また文久3年吉村秋陽に宛てた書簡に「経義の講習は年内諸生のために、詩経・書経・易经其他四書循環講説罷在候事故、其度に篤と下見いたし、諸生の為とのみ不存、其間専ら自己の修養も在、其間と存じ精力をつけて講究いたし相勤め居申候。」と書き送っているように、塾生への講義は自己の研学修養であるという心構えを批握している。絶えず進歩しつつある者のみがよく人を教え得るの言葉通りに、彼は俱学俱進、師弟同行、君子の学は己れの為にするの精神をもって、塾生の教育に当たったのである。此処に彼の教育の秘訣があり、また彼の教育力の偉大さがあったと思われる。

彼の塾生への講義態度については、強い熱意と愛情とをもって、懇切丁寧に難を避かず煩をいわず、あたかも親子の如き情愛をもって指導に当たっている。例えば『肆業余稿』第285項において、「この故に我常に吾が子輩に向って、横説堅説反復丁寧、言語その煩を覚えず、時光その久しきを厭わず、直ちに父母の子を視るが如きと一般なり。」と語っており、また門下生の一人土屋弘が『草菴先生行状』の一節において、「先生平日の言談は口やや

吃なり。然れどもその書を講ずるに方るや、弁論明暢にして、要義処に至る毎に、大声叱呼、滾々として舍かず、聴く者悦服して感嘆せざるなし。」と言っているように、教えて倦まない底の熱心さと親の子に対するような愛情をもって子弟の教育にあたっている姿を彷彿させるものがある。げに教育は愛と熱意であるという昔の教育者の風格を如実にあらわしているではないか。

彼のこの講学への熱情は、子弟に向っても、家の事をすっかり忘れさせて家業を顧りみず、勉学に専心せしめようとした。彼が北垣晋太郎（後に国道）の指導に当って、北垣が家の養蚕手助けのため、しばらく帰省を願い出た際、養蚕は農家必要のことであるが、今こそ実に立脚の地を定むべき一大緊要時節であるとして、これを許可しなかったことがある。このことは、明治40年に行なわれた草菴30年祭における北垣男爵の祭文の中に次のようにみえている。「国道其の性愚直、其の質短氣に過ぐ。先生深く之を洞察して、その教育の方、心切周到なり。……其の一証を挙げれば、国道13才の時、我が父母先生に乞いて、養蚕期間国道を家に帰し、其の業を実習せしめんとす。先生これに懇書を与えて曰く、晋が性質愚直豪胆なり。能く之を養えば用うべき器とならんも、其の一步を蹉けば、遂に回すべからざるべし。これによりて彼を教うるに専ら経書を授けて、漫りに歴史討論を読ましめず、目今劉氏人譜及び呉康斎目錄を講ず。実に立脚の地を定むべき一大緊要時節なり。蓋し養蚕の業は農家必要の事なりと雖も、苟も人として心の安処なく、意の定処を知らざれば、世に立ち何事をか為し得んや云々」と。この北垣氏は7才の幼少の時から最初の門人の一人として立誠舎に入り、草菴の薫陶を受けることほとんど10年であった。一時生野義挙の際、意見を異にして草菴と別れたけれども、終生師恩を忘れなかった。明治初年政府の命で、幾度か鳥取藩に往復する途中、宿南村に近ずくと必らず馬を下って、此の村を通り過ぎるのが慣しであった。伴の者が怪しみこの由を問うと、「宿南村はわが恩師の在した郷である<sup>1)</sup>。」と答えたと言う。この師にしてこの弟子ありの感を深くするところである。

1) 池田条郎 「池田草庵」 179頁

青谿書院における講義内容については、当時の私塾におけるものと大同小異であるが、その目的と内容とをはっきり示したものを作っているのは、他に珍しいものではなからうか。その最初のもは『肄業余稿』第62項にのせている『吾門授業之次第』であって、それには次のように言っている。「易を読んで以て其の深奥を探り、小学を読んで以て其の規矩を守り、史を読んで以て其の世故を考え、而して傍ら唐宋8家文を読み以て其の歩趨馳聘を習う。それ而して後、以て徳を養うべく、以て身を修むべく、以て変を制すべく、而して又以て文字に託して之を永世に伝うべし。此は是今日吾門授業之次第、汝輩宜しく此の意を知るべし。」これは安政7年に塾生に示したものであるが、易によって養徳を、小学により修身を、史により制変を、唐宋8家文により託伝を体得すべしとして、簡単明瞭にその目標と内容を示していると共に、草菴の学問傾向を知ることできると思われる。

これを更に整理拡大して作られたものが、年代は未詳であるが、次に掲げる『授業次第大略』である。

#### 授業次第大略

小学，大学，論語，孟子，中庸，近思録

此は是れ学を始めてより徳を成すに至るまで、日用の間、切近著実の学問なり。その他孝經一書の如きは錯誤少なからず。かつ其の要領は朱子采摘して小学に載すれば則ち必らずしも別に講習を要せず。

詩經，書經，易經

此は是れ士大夫の家国天下經濟の大学問なり。

其他3礼儀礼は残欠全たからず。周礼は疑義少なからず。戴記亦純駁厯難なり。かつ其の日用切近の語、朱子往々摘して小学中に在り。是の如きの書は学通識明の後、各自斟酌商議すべきなり。

18史略，左伝

此はこれ世故を閲し、興亡を按ずる投機応變の学問なり。

其他国語は左伝の比に非ず。公穀二伝の如き亦恐らくは附会を出でん。是より以往、本史編年の類は各自涉獵して取益すべきなり。

## 文章軌範，唐宋8家文

此はこれ文字著作，立言練習の学問なり。其他明清諸名家の文は亦各自任意習読すべきなり。

右授業次第大略かくの如し。惟だ願わくば士子輩学庸等の書を読み、以て其の根基を建堅し、詩書等の書を読み、以て其の規模を展拓し、左伝等の書を読み、以て其の伎倆を磨練し、8家等の読を読み、以て其の建言の法を暗じ、上は則ち君父に献替し、下は則ち他邦に応接す。然らざれば則ち一家の言を建て、之を後世に伝う。而して其の時を待つも亦丈夫の壮志なり。

## 伝習録，劉氏人譜，儒門語要

此はこれ一般篤志の士，用功路径，得失商量の学問なり。

是より後，宋明諸儒文集語録の類は商量講究し，其の旨趣を博め以て古今の学変を極むるも亦可なり。

## 大学衍義，名臣言行録，靖献遺言，日本政記等

此はこれ燕問従容，啓沃密切の学問なり。是より外，和漢先輩の著す所は，世道人心に益するの類あらば，択んで之を読むも亦可なり。

この2つの授業次第に共通していることは、草菴が講義に際して教育内容として、経と史と文の3つを3大科目として重要視していることである。しかもこの3科目のうち、経と史とを特に重要視している。『肆業余稿』第一項に、「人の学を成す所以のもの経史の2途のみ。是を除いて外は則ち千巻万冊も総て無用に属す。」と述べ、つづいて経は立本のため、史は応務のためが必要であって、立本応務が出来れば学者のこと畢るとさえ言っているのである。この経と史との関係について、彼は経は徳育を、史は知育にかかわるものと考え、道德と知育の密接不離相互媒介的關係を強く指摘している。即ち『肆業余稿』第336項において、次のように述べている。「識は徳に基き、徳は識に発す。是の故に徳高くて識益々明らか、識明らかにして徳益々高し。徳に基くの識に非ざれば則ち真識に非ず。識に発するの徳に非ざれば、則ち徳恐らくは其の至る者に非ず。」と。この考え方は王陽明の知行合一説に

近いものであるが、アレテーとしての道徳と生きた知識との関係を非常によく表現していると思われる。彼にあっては徳は養でなければならず、識は練でなければならぬと考え、養とは読書講義の際、優柔饒飫即ち気永くその事物を玩味することを意味し、練とは「史を閲して跡を考え、前に見て後を戒しめ、禍を未萌に慮り、福を将来に迎え、以て我が志を為すの謂なり。」<sup>2)</sup>と述べている。このように彼は徳育の背景に知育を、知育の根底に徳育を考えて塾生の指導に当り、真の全人教育人間完成の教育を考えたのである。しかも単に道を説くのみが目的でなく、更に重要なことは道の実践であることは言うまでもない。久保田精一氏が「躬行実践純然たる道徳の君子なり<sup>3)</sup>」と言っているように彼は常に実践躬行、率先垂範以て多くの塾生を指導して行ったところに、彼の教育の成功があったと思われる。文章については、京都苦学時代に相当関心をもっていたようであるが、文章を以て彼の生命とはしていなかった。従って彼の親友春日潜庵が文章に耽るのをむしろ戒めたくらいである。しかし彼の文章は実に名文であるものが多いと言われ、作文についても高い見識をもって指導にあたったであろうことは『肆業余稿』中によくあらわれている。

次に塾における訓育の状況は如何であったであろうか。前述したように、彼は慎独を非常に強調し、自身もこれを実践しただけあって、訓育は非常に厳格であり、規律節制整頓などを重んじたことは、じゅうぶん察知し得られるところである。門人土屋弘氏の『草菴先生行状』中に、「身を持すること厳格、常に礼節を尚ぶ。毎晨炷香端坐すること数刻、然る後諸生に接す。諸生長幼の序を以て講堂に列す。先ず先生を拝し、畢りて互いに礼を行なう。而して各業に就く。其の寝に就かんするや復た是の如し。終年易えず。循々惟だ謹む。子の嚴君に事うる如し。」とあるように、草菴自身が厳格に身を持して諸生に対し、師弟の道、長幼の序を正しく守った。従って講義の間も情容は嚴に戒めたところであって、形を正し威儀を整え、周囲を整頓して講

---

2) 肆業余稿 337頁

3) 日本教育史資料巻12 146頁

義を聞かしめたのである。『肆業余稿』第10項に、「書室を掃き、几案を拭き、襟を整えて坐る。筆硯紙墨、皆定位に在り。」と諸生に諭して、学問をするには起居動作、外形の正しきことの必要を強調している。しかしこれが単なる形式主義でないことは、同じく第9項において、「蓋し内正しければ自ら外の正を好み、而して外の正亦以て其の内を養うに足る。これ内外挾持の方なり。」と言っているように、学問の成就、人間形成には内外挾持の方すなわち内精神の心構えと、外形の正しさとが相待たねばならぬとの立場からであった。このように彼の講義態度が非常に厳格であったことは、彼の愛する甥盛之助が、佐藤一斎の講義を聞いた時の感想を、この時の彼の旅日記『緊急備忘録』の中において、愛日楼の塾生の態度が意外にも眠者が多く、座中厳しくないことに一驚を喫した旨を記していることにも窺知し得られるところである。

彼はまた働きつつ学び導くということにも非常に注意を払ったようである。『肆業余稿』第94項に、「日用の間、柴を運び泉を汲み、務めて労働の事を為す。……此は是れ山間講学教養の微意なり」とあるように、彼は努めて労働に従事させようとした。寮舎の生活は生徒の自炊によって行なわれ、薪炭洒掃すべて塾生の手によって行なわれた。更に書院の周囲に数畝の畑を拓いて野菜類を植え、課業自炊の余暇にこれが栽培に従事させている。彼においてはこの労働の目的は柔弱と宴安を戒しめ、身体の強健を図り、以て他日の備えに応ぜしめんがためであり、現代の労作教育の理念とは趣を異にしているが、徳川時代の私塾の特色の一つはこの種の労作教育であって、青谿書院の教育もこの例にもれないものである。

彼はまた散策を奨励し、努めて彼のこよなく愛した附近の山川を塾生と共に歩いている。詩集や文集中に「携童」という語がよくでてくるが、これは散策中の塾生の教導を意味しているのである。この散策は彼によれば精神を転換して、健康増進の意味をもつと共に、師弟ともども山川に遊ぶことは暈の上での講義と違って、師弟間の接触を非常に密にし、個性指導上効果のあることを認めている。この散策間の教育は王陽明の故智にあやかったもので

あると思われることは、彼が友人林良斎の依嘱を受けて作った『弘浜書院記』の中に明らかである。すなわち「昔は陽明王子此の学を唱うるや、同志を点化するに多く之を登遊山水の間に得たり。蓋し人の世に在るや、憂得患失、屈抑悲苦、殆んど勝れざる如し。一旦飄然としてかの山水の間に逍遙すれば、輕快脱灑、塵氣洗うが如く、心目豁開、真機透露。是を以て其の言入り易く、其の心化し易し。是れ王子引誘の微旨なり。」と。彼は心から自然を愛した人であり、自然を逍遙しながら、塾生と心目豁開心機透露の状態においての教育をも考えたようである。

次に塾舎における生活はいかがであったであろうか。寮は最初書院の屋根裏二階を当てていたが、狹隘となったため、更に2階建2棟を新築している。ひとつは一階2階共8畳敷で、階上を松風洞、階下を小心寮と名づけ、他は10畳2間で、階上を晩晴楼、階下を精義寮と名づけた。寮生の最も多い時は60人を超えたようで、その取締には年長者を推して室長とし、諸事の取締を命じている。

塾規としては最初は成文的なものはなく、必要に応じ時に応じて注意し訓戒するにとどまり、草菴の言行を中心に塾全体が動いていったようである。しかし寮生が増加するにつれてその必要を感じたらしく、晩年の明治4年に塾規を制定している。この塾規の自筆のものは現在も書院に保存されている。

### 塾 規

1. 晨興起居し疾病己むを得ざるの外、塾中一体同様たるべき事
1. 塾中にて飲食縦恣、もっとも嚴禁の事
1. 塾中掃洒筆硯の間、屢屢の末に至る迄、都て乱雑を戒しむべき事
1. 出入の砌常に師長へ咨稟いたし申すべき事
1. 在外の行儀、大概右等に準じ相心得申すべき事
1. 平生教育の方毎寮席長へほぼ申し入れ候間、塾中の事一切席長に諮議いたし申すべきもの也

明治4年未8月 青谿書院主人誌、



主人固より遠朋の来遊を楽み候へ共、併し何となく志趣其の方向を異にし、毎に塾規に触るる者は、自然吾塾中の風儀に關係し、当人においても何の所益もこれなくかくの如きの輩は竊に又其退去を憾みず、此の意かえってまた深く来遊を冀う者体諒せよ

今左にこの塾規について若干の考察を進めてみよう。第1条は多くの塾生に対して四民平等何等上下の差別をつけていないことを規定しているが、このことは注意すべきことである。この四民平等の思想はすでに前述したことであるが、当時は封建的階級思想の厳存している時代であり、学制発布以前にこのことを規定しているのは、彼の進歩性を見ることができる。当時小島省齋に与えた書簡に、「当方塾規のことなど、拙は矢張華は華とし、士庶間は是迄通り差別なく、只齒を以て次し候ことに致申候。如何に商量致し候へ共、先づ此通り可然と断定仕居候。日外此義御商量申上候処、尊意被仰し候に付、此段申上候也。」と述べながらも、省齋の塾は士族が中心である故、当方のように平民中心とは事情もちがうであろうとも述べている。従って彼といえども藩公の子弟や公卿等が入門した時には、それ相当の別扱はしている。このことは明治6年10月10日豊岡県参事に提出した家塾開業願中の塾則には「士庶の差別を論ぜず、学業の進退を管せず、一切年齒の高下を以て生徒の次第を定め候事、只し華族に至りては年齒を論ぜず、是迄士庶の上頭に置き申候」と述べているように、必要の場合には特例を設ける配慮をしている。これは当時としては止むを得ないことであったであろう。

第2条は飲食についての規定であるが、この条は飲食度なき縦恣を厳禁しているだけであって、こまかい規定はなく大綱だけをおさえている。草菴は幼時から貧しい生活をしてきたので、食生活も非常に質素であった。寮の炊事はすべて塾生において行なったものでいわゆる自炊制であったようである。塾生のうち年長で信用のある者が炊事係や金銭収納のことに当り、炊事係が献立表を作ってこれを取締に提出してその認可を得、生徒当番が食事に關するいろいろのことに携り、塾生以外の他人の手はからなかった。また13才頃の若輩は主として洒掃の仕事や小使走りにあたり、15、6才の者が炊

事、年長者が取締に当るという仕組みであった。調理が終るとまず塾生の当番はこれを先生に上り、草菴は常に塾生と共に会食されたようである。ここにも師弟一体の教育があらわれている。食料は毎日米5合、外に薪炭、魚菜類として些少の費用を要したようである。しかし金納制も認められていた。

第3条は整理整頓に関する規定である。草菴はこの点について神経質と思われるくらい凡帳面であったことは、未亡人の言として、「火鉢を置き机をあんずるにも正しからざれば憚らず。必らず畳の縁より測りてその地位を正し、夜具を敷くにもまた此の如し」と伝えられている程である。従って塾生に対しても此の点は厳格であったことは既に述べたところである。

第4条は出入の際の届出に関する規定であるが、寮生活においてのこのような定めは、何処でもみられるところである。この届出に関してひとつの挿話として、草菴が門弟富田仙助の保証人大石豊後に宛てた書翰がある。それによると、富田が出入の際塾生に対して一々挨拶をせぬために塾生に憎まれ、塾生一同よりふとん蒸しにあった事件を書き送り、保証人の了解を得ているのである。このように塾中において単に師長のみでなく、他の塾生にも出入の時にはお互いの間に挨拶が行なわれ、それをしないものは軽い制裁さえ行なわれていたようである。このことは戦前の師範学校の寄宿舎生活を偲ばしめるものがある。

第6条によると塾の管理はすべて席長に委していたと思われる。ただ席長がいかなる権限をもち、如何に塾を管理したかは不明であるが、この条文によって察せられるように、草菴は塾の経営に直接には関係せず、席長を中心に自治的な運営を行っていたと思われる。

以上述べ来たところより考えられることは、青谿書院全体を通して流れる特色は、広い意味においての道德教育であり、人間完成への教育であったと言える。彼自身も言うように青谿書院は緝読書の所であり、従って子弟を教えるよりもまず自己の研学修養人格完成の場であり、自然を友として、子弟相携えての俱学俱進の場であり、世事に煩わされることなく一意子弟の教導に努めた所であった。教え学ぶ内容は支那の経史が中心であったが、彼の

自己への忠実と自由への欲求は、現代のヒューマニズムの精神と相通うものがある。彼の主著『肆業余稿』は時に時世を論じてもいるが、全篇これ道を求めるものの心構えや、内的生命の涵養人格形成の方途でないものはない。彼は実に35年間という長期間にわたり千名近い多数の子弟を教導したが、自身は決して時流に走らず、慎独による人格完成をめざして、一意専心子弟の教育に尽した典型的教育者である。彼の名声はさほど有名ではないが、いわゆる根に培った教育者としての業績は永遠に朽ちないものがあるであろう。